「新しい契約」　　２０２３年1月１５日

コリントの信徒への手紙一１１：２３～３４

佐々木佐余子

今朝のテーマは「主の晩餐」です。重いテーマです。ところで、なぜ「主の晩餐」というのでしょうか。晩餐とはディナーであり、午餐のこと、夜の食事のことですね。元々、主の晩餐とは、イエスさまが十字架に掛けられる前、弟子たちと「過越の祭り」の食事をしたことに由来しているのです。一年に一回の過越の祭りには夕方から弟子たち一同集まり過越しの食事をするのでした。初代教会のクリスチャンたちは、そのころ、大きな家に集まり、日曜日はイエスさまが復活された日なので皆で礼拝をするようになりました。ところが今朝のテキストの少し前になるのですが、20 節をご覧ください。「それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにはならないのです。」 21 節「なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。」とパウロは嘆いています。そのことでコリントの信者たちはパウロに叱られてしまいます。そこで 23 節に入るのです。「わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、24 節、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました」とあります。わたしの体、とはどのような意味でしょうか。もしかして、この体はパンから変化して実際のイエスさまの体だと勘違いしてはいないでしょうね。勿論、そのように解釈する教派もあります。例えばカトリック教会は、そうなのです。聖餐式で配られるパンはイエス・キリストの肉と変化し、葡萄酒はイエス・キリストの血である、と考えました。ですから、パンしか信者はあずかれません。もし、葡萄酒を間違ってこぼしたら大変な事になるのです。何しろイエスさまの血潮ですから、こぼれたところを切り取って、或いは床にこぼれたら、その床を切り取って大事に保管しなければならないのです。ですから聖体拝領はパンのみしか与えられないのです。しかし、パンが直接主イエスのみ体に変化するという考えは非常に無理があるのです。そうではなく、わたしたちの罪のために十字架に掛けられたイエスさまのみ体を思いつつ記念していただく信仰です。２５節「また、食事の後で、杯も同じようにして、『この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました」とパウロは言っています。この新しい契約はどのような契約でしょうか。この新しい契約とはイエスさまが最後の晩餐の時に言われたのです。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」（ルカ 22:20）と言われましたが、モーセによる神さまとイスラエルの古い契約は、今やわたしの十字架の血によって新しく立てられる契約なのです、と宣言されたのです。十字架刑は血を流します。どうして血と葡萄酒を結び付けたのでしょう。葡萄酒が赤いからでしょうか。であるなら、ザクロの汁も赤い。主イエスは新しい契約に神の国で祝われる喜びの祝宴を想起していたの

です。その前祝いとして葡萄酒を用いられたのだと思います。２６節「だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げしらせるのです。」と語ります。主の死を告げ知らせる、という言葉は様々な意味があるのです。告げ知らせる、は告知するという意味です。人々に知らせなさい、という意味です。すなわち、イエスが主であられます、その方がわたしたちのため死んでくださったこと、その死によって新しい契約の民として教会が存在するに至ったこと、そして、主は死んでしまってもういないのではなく、今も生きておられ、主の晩餐・聖餐式におられること、やがては主が来られ来臨（再臨）されること（終末のとき）を聖餐式にて告げ知らせるのです。ですから、聖餐式はただやっているように見えるかもしれないけど、実に多くの宣教の告知が込められているのです。少し余談になりますが、アメリカの植民地の時代、マサチューセッツ湾植民地がありました。そのお話なのですが、17 世紀ごろ、本当に驚きの植民地なのでした。元々信仰深いピューリタン（清教徒）の群れがその植民地を造ったのですが、政治に参与するにどのような資格が必要かと考えたのです。選挙権を与えるにどのような人が良いか、その頃、本国のイギリスでは土地持ちの貴族が選ばれていました。ですがそれでは政治が一向に皆のためにならないのです。貴族ばっかり優遇措置が取られてしまい、貧しい人たちはいつになっても貧しい暮らしをしなければなりません。そこで考えられたのは聖餐式でした。植民地の人たちは皆、教会に行っておりクリスチャンでした。聖餐式に預かれる人たちは善良で良い人たちだから、そのような人に資格を与えたら、きっと世の中良い方向に向かう。アメリカには土地はいくらでもあるから土地持ちは資格にならない、と考えたのです。そして信仰深い信者に選挙権を与えました。またそればかりではなく、職に就くにも聖餐式を受けられる人にだけ公民権を与えたので、公民権とは市民権ですが、市民にならなければ公の良い職には就けないのです。いかに学歴があっても、お金があっても、その人が聖餐式に与れない人であったなら、公職には就けない制度を作ったのです。その発想はいいように思いますが、やがて破綻してしまいます。というのは、信仰が文化になるとキリスト教が当たり前の社会になります。すると、子供たちが信仰告白が出来なくなってしまうのです。皆いい子に育っているので、幼児洗礼は受けたけれども、成長の過程で神の臨在を感じなくなってしまう。いかに神が罪深い私を救ってくださったかを立証しなければならないので、そのような信仰告白が皆出来るわけではない。それで植民地の政治が続かなくなってしまい破綻したのでした。でも考えるに、無謀とはいえピューリタンが信仰を基盤にして政治を考えて実践したことはそれだけ政治を大事にしていた証です。

次にパウロは聖餐式にあずかる極意を告げます。２７節「従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。」と言います。パウロは第２回目の伝道旅行でコリントに来ており、４年伝道してエフェソに伝道の拠点を移しました。コリントには別の使徒が伝道し、その後、長い間無牧の状態になっていました。その間様々な問題が起こったけれど、パウロは見捨てずコリントを愛し続けたのです。送られた手紙は今も残って、こうしてわたしたちの良い参考になってい

るのです。もしコリントの教会が優等生で何の失敗もなく人々が信仰生活を送っていたら、後の者は引け目を感じ何の参考にもならなかったのです。ですからコリントの教会の実情を知って安心しています。

ふさわしくないままで、とパウロは言っていますがふさわしくないままとはどのような意味でしょうか。これは教会の伝統では、信仰告白をせずに聖餐式を受けることであるとされています。従って、信仰告白をせずに聖餐式にあずかる者は、主の体と血に対して罪を犯すことになるのです。そして、２９節にあるように「主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです」とありますが、恐ろしい言葉です。わきまえずに飲み食いする者は３０節に連動し、「多くの者が死んだ」に続くのです。聖餐式を受ける者がよく自ら反省し、信仰を与えられているのか、本当に信じているのか検討する、そのような自己検証をしなければならない、と教えています。もしせずにいい加減に受けるなら裁きを招くとパウロは言っています。「弱い者や病人がたくさんおり、多くの者が死んだ」のは聖餐式をわきまえないで受けたからだとパウロは言っていますが、これはパウロの主観であって、果たしてこのように言ってもいいのだろうか、とわたしは疑問符？が付きます。多分、コリントの教会で多くの信者が病気になったり死んだりしたことからこのように警告の意味で言ったのかもしれません。その当時は今のような医学の進歩はなかった頃なのでそのように考えたのかもしれません。３２節を読むとこうあります。「裁かれるとすれば、それは、わたしたちが世と共に罪に定められることがないようにするための、主の懲らしめなのです」と言っています。パウロは以前、「このような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それは主の日に彼の霊が救われるためです。」（コリ一 5:5）と言っているように、多くの者が病気になったり死んだりするのは主の懲らしめのためだった、最終的に霊的な滅びからまぬかれさせるための主の御業であったとしています。そうだとするとパウロの深い信仰に教えられる気持ちです。今はあまり言われなくなりましたが、フリー聖餐が一時話題になっていたことがありました。フリー聖餐とはどのような意味でしょうか、自由な聖餐という意味でしょうか。イエス・キリストを信じてもいないのに聖餐式にあずかることです。誰でもパンと葡萄酒をいただける。それはどこから来たのかというと、多分アメリカからだと思います。アメリカは州によっても違いますが、子供たちは多くは幼児洗礼を受けていて、普段親から或いは学校で聖書を教えられているのです。日本のかるたのように例えば、「い」だったら「犬も歩けば棒に当たる」や、「あ」だったら「挨拶をしてみんないい子」とか、そのようなかるたのような教材があって、「A」だったら A で始まる言葉「アダムはエバと結婚した」、「B」だったら「Bible 聖書は神の贈り物」とか聖書のかるた遊びがあり、普段遊びながら教理を学んだり聖書を学んだりしているのです。ですからそのような学びがあるから、たとえ信仰告白をしていなくても、聖餐式に入ることによって、かえって自覚が生じて信仰告白に至る人もあるようです。ですから日本とは全く文化が違うので、あまりアメリカの真似はしない方がいいと思います。それこそ神から懲らしめを受けるかも知れません。牧師もその点慎重に考えたほうがいいのではないで

しょうか。

新しい契約とは、主のみ体であるパンを裂き、主の杯をいただいて、イエス・キリストに従っていくということをもう一度再確認をするということです。ある方は言われるかもしれません。一回契約を結んだら何回もする必要はないのではないか。そう考える人もおられるかもしれません。でも人間は弱い人であり、忘れることもあります。一年に何回もして忘れる頃にもう一度、神さまのみ前に出て、決意を再確認し、自分がふさわしい者か、吟味する必要があるのです。聖餐式は神さまが私たち一人ひとり招いて下さり、将来、来たる神の国の祝宴の前祝いとして与らせてくださる儀式なのです。聖餐がユーカリスト・感謝と呼ばれる所以です。

そして最後にパウロはこのように付け加えています。３３節「わたしの兄弟たち、こういうわけですから、食事の時に集まるときには、互いに待ち合わせなさい。」３４節「空腹の人は、家で食事を済ませなさい。裁かれるために集まる、というようなことにならないために。」と教えています。食事の時、富める者が先に勝手に食べるのではなく、皆が揃うまで待ちなさい。もし、空腹で待てないのなら、家で食べて礼拝に出なさい。聖餐はおなか一杯食べる儀式ではなく、主のみ体に預かる厳粛な儀式なのだから、と優しく諭しているのです。パウロはまた、コリントの教会に行きたいと願っているのです。パウロはそのような絶えずごたごたの多い教会を見放せず、主イエス・キリストの示された新しい契約を覚えさせるために訪問したいと願っています。